

令和4年度事業報告書

令和4年度は新型コロナウイルス感染症が依然として収束が見通せない状況の中でも感染防止対策を講じながら行動制限の緩和が進められてきた。

当協会はこのような状況の中で、厳しい財政状況に対処するため、財源の確保と経費の節減を徹底するとともに、当協会が抱える組織課題を可視化して、組織間の信頼と組織の存続に取り組んできた。

鉄道少年団はコロナ禍で実践活動の制限や公徳キャンプの中止を余儀なくされた2年間はあまりにも長く、活動したいという団員の要望に、多くの鉄道少年団は保護者の理解と感染防止対策を徹底して実践活動を再開し、実践活動が出来ない鉄道少年団は「鉄道少年団プロジェクトチーム」が支援してオンライン活動を展開することで団員の士気と帰属意識を高めてきた。

当協会は、将来予測される組織体系の変化が鉄道少年団の影響に及ばないように「従たる事務所」の役割分担について検討してきた。特にJR各社に所在する「従たる事務所」の在り方については今後の動向に対処できるよう準備を進めている。

1 マナー向上運動

コロナ禍で長引く日常生活への制約による厳しい状況が緩和されつつあるものの、当協会は鉄道を利用するお客様に感染リスクを低減し、交通道徳意識の高揚と安全・安心について訴えてきた。

(1) マナー向上キャンペーンの推進

当協会は、JR6社とJTのご支援による「乗車マナー・喫煙マナー向上キャンペーン」は、大変厳しい状況ではあったが、昨年度に引き続き1回開催することができた。キャンペーンは新幹線及び特急列車を除く全列車(15,017車両)の中吊りポスターと全国駅構内(1,934駅)に駅張りポスターを掲出して、列車内や駅構内における乗車マナーと喫煙に関する種々のマナーを広く世の中に訴求することができた。

(2) ルール順守キャンペーンの開催

当協会は、JR6社と日本たばこ協会のご支援による「ルール順守キャンペーン」を開催し、「エスカレーターでの事故防止」と「民法改正で成人年齢が18歳になっても喫煙は20歳から」の啓発ポスターを首都圏エリアと近畿エリアの新幹線及び特急列車を除く全列車(11,035車両)と駅構内(673駅)に掲出し、交通機関を利用されるお客様や青少年にルールを守りマナーをわきまえた行動ができるよう訴えた。

(3) JR各社のマナー向上運動に協賛

当協会は、JR各社が実施する「マナーキャンペーン」に協賛・参加して、お客様がルールを守り、マナー・モラルをもって、駅構内や列車を安全で快適に利用していただけるよう取り組んだ。

(4) 旅のニューマナー運動の推進

JR 6社の主要駅に配備してある交通道徳協会所有のマナーボードに年間を通してマナー向上のポスターを掲出し、お客様に旅のマナー向上を訴えた。

2 鉄道少年団

昭和35年10月22日に発足した鉄道少年団は、将来を担う少年少女に向けて、鉄道を中心とした社会貢献活動を実践することによって、社会奉仕の精神を育み、道徳心の心得と組織の力を体感し、行動できる人への取り組みを行ってきたが、令和元年末に中国湖北省武漢市に端を発した「新型コロナウイルス感染症」は、鉄道少年団の活動制限が余儀なくされ、3年に及ぶ実践活動の自粛や公徳キャンプの中止は団員に与える影響があまりにも大きく、前年度から「コロナ対策マニュアル」による実践活動の再開やオンライン活動を更に全国展開するなど、団員の士気や帰属意識を低下させることのないよう取り組んできたが、コロナ禍で団員の減少や指導者の世代交代における継承の困難性が表面化し、鉄道少年団の存続に甚大な影響を与えかねないことから、団員・指導者の確保と健全な組織運営の確立と活動を活性化するため、指導員を増強して指導体制の強化に努めてきた。

(1) 活動の活性化

① 実践活動

コロナ禍の影響を受ける中、マナー向上運動、体験学習、団体行動訓練等の実践活動は昨年度に引き続き、感染防止マニュアルによる以下の活動要件を徹底し、全国38鉄道少年団は延べ281回開催し、団長以下4,197人の団員が参加した。

活動要件

- ・ 活動体制を確立し、参加者の体調確認や活動中の環境・行動に万全を期する。
- ・ 「鉄道少年団活動（コロナ対策時）」に従って、検温及びマスクの義務化、手洗いの励行、3密（密閉空間・密集場所・密接場面）の回避を徹底する。

② オンライン活動

コロナ禍で外出自粛や3つの密を避けることの要請を受けて、行動が制限される状況に応じて、令和3年度に導入したオンラインコミュニケーションツールを活用し、鉄道少年団オンライン活動、複数団によるオンライン交流や会議・打合せ等、有効に活用し、特にこれまで実践活動ができなかった6の鉄道少年団はオンライン活動で延べ131回1,969人が参加することができた。

(2) 組織体制の確立

① 指導者

これまで、鉄道少年団の団長及び副団長の多くは国鉄からJRを退職してから、その経験を生かして鉄道少年団活動を運営し、団員の指導にご尽力をいただいたが、JR各社の退職年齢の引き上げや退職者数の減少により世代交代が進んでいない。

このため、副団長を指導員の中から選任し、将来の団長候補として指導してきた。

② 指導員

鉄道少年団が発足してから、「全国鉄道少年団規約」で指導員が規定化されていなかったことから、各鉄道少年団の指導体制は不規則で統制されておらず、指導員の確保に課題や質を高めていくことができなかった。

このため、平成30年4月1日に「全国鉄道少年団規約」を改正し、「団は、団長、副団長、指導員及び団員で組織する」として、指導体制の強化に取り組んできたが、人材の確保・育成は難しく令和3年4月1日に発足した「鉄道少年団活性化プロジェクト」のスタッフが中心となって指導員体制の確立を目指し取り組んでいる。

③ 団員

鉄道少年団の団員は1,000人前後で推移してきたが、少子化の影響やスポーツ・アウトドア等、価値観の多様化が進む中で、平成30年から減少の一途をたどり、更にコロナ禍で毎年100人前後の団員が減少し、令和4年度初は653人まで落ち込みが激しく総支部、各支部・鉄道少年団は団員の確保に団員募集パンフレット・手作りポスターの作成やホームページのリニューアルをするなど様々な取り組みを行った。

(3) 公徳キャンプ全国大会

新型コロナウイルス感染拡大で令和2年度から中止している公徳キャンプ全国大会は、鉄道少年団活動に与える影響が大きく看過できないことから総支部及び支部と調整し、「第67回公徳キャンプ全国大会は7月30日から「愛知県美浜自然の家」にて開催することで準備を進めてきたが、新型コロナウイルス変異株の急速な感染拡大により感染症患者が急増し、特に児童・生徒の感染が増えていることを踏まえ、直前の7月20日に中止することとした。

(4) 全国鉄道少年団作文コンクール

令和2年度と3年度の作文コンクールは、コロナ禍で主な作文テーマとなる鉄道少年団活動やキャンプが中止等により応募作品は激減し、作文の内容も鉄道少年団や団員を気遣う作品が多く寄せられたことから、審査は行わず参加者全員に参加賞を進呈してきた。

令和4年度も依然としてコロナ禍は終息の兆しはみえないが、収束状況を見つつ各種の制限が順次緩和され、鉄道少年団は全国各地で活動再開するなかで「第40回全国鉄道少年団作文コンクール」を開催した。応募作品は33鉄道少年団から232編と更に減少したものの、作品内容は活動が出来た喜びや今後の本格的な活動への意欲などが多く綴られていたことから、コロナ禍以前の作文コンクールに戻し、応募作品を一次審査で全作品の審査を行い、優秀作品は二次選考で会長及び部外の審査委員によって各賞を選考し、全国代表者会議で表彰式を挙行した。

・ 作品の応募状況

小学生の部	64編
中学生の部	85編
高校生の部	42編
一般の部	26編
保護者の部	15編
	合計 232編

3 「社会を明るくする運動」作文コンテスト

法務省が主催する作文コンテストに東京鉄道少年団と八王子鉄道少年団から12編の作文が応募され、小学生の部2編、中学生の部2編を推薦することができた。

4 広報誌「明るい旅」の発行

「明るい旅」は当協会の広報誌として、JR各旅客会社とグループ会社及び協賛団体や企業等のご支援・ご協力をいただき、社会貢献事業や地域の活性化に取り組む団体・企業の紹介、JR各社や他の鉄道会社の乗車マナーへの取り組み、全国鉄道沿線

や鉄道少年団が活動している街を案内するなど、駅から街へ地域社会の発展と子どもたちの健全育成に向けて、春号・秋号・冬号と3回発行することができた。

(1) 「明るい旅」の企画・構成

各界でご活躍されてきた方々からの「巻頭言」は、東京パラリンピックのボッチャ金メダリストに輝いた杉村選手、喫煙ルールとマナーに取り組んでいる日本たばこ協会の池澤専務理事、郵便局と駅の業務を一体化した日本唯一のJR内房線江見駅長でもある若月郵便局長からメッセージをいただいた。「クローズアップ」は、日本ボッチャ協会を取材して杉村選手やボッチャを国民的スポーツになることを目指した地域貢献活動の紹介と日本博物館協会は普及啓発内容や全国博物館支援事業を紹介し、社会に貢献できる役割について取材した。「わが街わが少年団」は、和歌山・熊本・山形・恵那・七尾・福島の各鉄道少年団が指導員を中心に取材・編集を行い各号で紹介した。「Step by Step」は、株式会社アトレが地域社会問題となっている耕作放棄地の活用プロジェクトを紹介、交通道徳協会は事業内容やコロナ禍で活動する鉄道少年団を紹介した。「鉄道マナーを考えよう」では、JR九州と西武鉄道がマナー向上への取り組みについて各号で紹介した。「もっと先のレールウェイ」は、函館本線（長万部～小樽）・日南線（南宮崎～志布志）・徳島線（佐古～佃）の沿線を取材、鉄道少年団の活動やJR各社とグループ会社等のトピックスを各団・各社が紹介する「列島縦断」鉄道で行く旅シリーズは古戦場、山に登る乗り物、吊り橋を各号で特集した。そして、大分鉄道少年団が世界的な観光地となった別府から湯布院、四国鉄道少年団は大歩危小歩危から日本三大秘境祖谷かずら橋、長野鉄道少年団は国宝松本城と城下町を各鉄道少年団の団長・団員と取材し紹介する「鉄の細道」で構成した。

(2) 「明るい旅」の発行

「明るい旅」は、3回発刊して発行部数は各号10,000冊、配布先は、JR各社及び当協会関係者と全国の市民会館、文化会館、コミュニティセンター、図書館等の公共施設に置かせていただき、社会貢献活動を通して地域社会のお役に立つ情報や当協会の存在と鉄道少年団の活動を知っていただく役割を担っている。

主な配布先

全国図書館	2,100冊
公共施設（図書館除く）	3,400冊
JR 6社関係	1,900冊
当協会関係（会員・鉄道少年団）	2,600冊

5 全国代表者会議の開催

「新型コロナウイルス感染症」の感染拡大により、令和元年度から本部の全国代表者会議及び西日本総支部総会を開催できなかったが、当協会の厳しい事業運営と全国鉄道少年団の現状を鑑みると、公益財団法人として交通道徳協会は危機的状況に陥ることが避けられないことから、コロナ禍であっても開催することとし、これまで全国代表者会議に出席していなかった西日本総支部管内の支部・鉄道少年団も一同に介して、令和5年3月3日「全国代表者会議」を開催することができた。

会議の内容は、作文コンクールの表彰、令和5年度事業計画、公徳キャンプ全国大会の開催等と会議のメインテーマである「これから鉄道少年団の在り方について」厳しい状況下で鉄道少年団が如何にして組織を存続し、活動を活性化していくか、全鉄道少年団の実態を把握するため「鉄道少年団アンケート」を事前に実施して、集中討議を行ったが、限られた時間の中で結論を得ることはできなかったものの、互いに情報を共有して「高齢化していく指導者の世代交代」、「鉄道少年団が自主自立していくための指導員体制の確立」、「激減している団員の確保」に取り組むことを組織全体で一致した理解を得ることができた。

6 評議員会、理事会等の開催状況

評議員会 令和 4年 6月24日

理事会 令和 4年 6月 7日

令和 4年 6月19日

令和 5年 3月24日

附 屬 明 細 書

1 令和4年度 全国鉄道少年団活動実績

活動項目		回数(回)	参加人員(名)
マナー向上運動	清掃活動	141	2,185
	奉仕活動	募金活動	2 32
		福祉活動	11 89
会議・イベント	事故防止活動		5 72
	各種会議	90	563
体験学習	行事・催し物	81	1,192
	講習会	50	692
	見学・視察	57	874
	スポーツ・ハイキング	11	160
その他の	キヤンプ	4	93
	上記以外の活動(自宅等)	55	623
合 計		507	6,575

2 令和4年度 第40回全国鉄道少年団作文コンクール実施結果

	応募数
小学生の部	64
中学生の部	85
高校生の部	42
一般の部	26
保護者の部	15
合計	232